

6. 民間信仰伝承

6. 1 寺本地区の西浦14か村供養(虫供養)

寺本地区の常光院で行われた虫供養は、「知多郡西浦14カ村供養由来」にあるように、明治時代の初めまで行われていた西浦地区14か村供養につながるものである。しかし、明治9年に14か村が解散して以降は、それぞれの村内での念仏供養へと変化した。

寺本村7地区では、2か月毎に1回供養を行った。供養の内容は、月番の念仏供養・お紐解・春秋彼岸の大供養・土用の日の虫干しがあげられる。

昭和24年から、寺本地区(常光院)と東海市の清水・姫島地区で、秋の彼岸時に3地区合同・回り持ちで虫供養が復活している。

6. 2 知多市の講

「講」とは元来仏教的な集いでしたが、色々な組織が「講」と呼ばれるようになり、信仰的な講から経済的な講まで八幡地区にもたくさんありました。その主なものをあげると次のようになります。

津嶋講・天王講

組の総代が旧六月十五日に津島神社へ代参して、神札を受けてくると翌日の十六日から組ごとに天王山と称してまつり、九月九日の「ともしあげ」まで、毎夕灯明を供えます。九月末日には天王講の子供が、笹の先に弊をつけて川に流しました。

この講の構成員は、若衆に加入する前の男子(小学校一年～六年)で、祭りが近づくとも年長の「親方」が仲間の子供を集め、あくまでも子供たちの自治で行われました。御飯屋を造るために池端で芦切りをして揃え、骨組みの材料や提灯を吊す柱や御燈を海で净めました。特に西平井の御飯屋は大きくて高く立派でした。初祭～中祭～終祭と続き、終祭を「ともしあげ」といってこの日まで燈明をたいたようです。天王さんの行事は十月三十日の「神送り」で終わりとなります。その日は、夕方竹笹に御幣をつけて神社に集まり、「笹ござれ、笹ござれ ♪ 笹葉の上にうち乗って、こ～んな結構なお日和に、出雲の国のおんやしろ ♪」と歌いながら各自が笹を持って行列をしてまわり、最後にお札を結んだ一枝を川や海に投げ込み、出雲の国に「神集い」に旅する神様を送りました。お札を投げ込んだ後は決して後ろを振り返ってはならぬというタブーもありました。「親方」たちはこの日を以て子供の仲間から離れ、若衆組へ入る元服の日を待つのです。

御嶽講

霊峰の木曽御嶽山を信仰するものです。「御嶽山まいり」は多い所では春～夏～冬と年三回行われました。

山上講

奈良県吉野郡の大峰山参拝のための講。平井では戦前数年おきに山上参りが行われていました。出発前日に参加者が集まり、「サンジョウサンゲ ロッコンショウジョウ オヤマニギョウジャ ダイゴンゲン」と唱え、八幡神社～神明社～御嶽神社の順序で回り、旅の安全を祈願しました。

阿弥陀講

一般には「ミダサン」と呼ばれ各地で行われました。これは尾張の国知多郡富田の荘(現東海市富木島町、宝珠寺台地)に生まれた良忍上人により、永久五年(1117)に開かれた、日本十三宗の一つである融通念仏宗の講です。融通念仏(大念仏)とは、自分一人の念仏と、他の百人千人の念仏とが、お互いに融通するのだという考え方からの名称です。「虫供養」と関連があると考えられます。八幡地区では、以前、廻間、中島、小根、平井、上平井、杉山、亥新田の七地域日割りで行われていました。阿弥陀堂の道具類は全て常光院に保管されています。

庚申講

一般に「オコシンサン」と呼ばれています。「庚申」とは「かのえさる」の読みで、庚申の年は六十一年目に、庚申の日は六十一日目にあります。したがって庚申の日は一年に六回または七回あります。八幡の平井には法海寺の境内に庚申堂がありました。同地区では講の宿もとが特別な三種類の掛け軸の前に集まり、「コーシンデ コーシンデ マイタレ マイタレ ソワカ」と念仏を唱え、その後お茶とお菓子でお日待ちをしました。

報恩講

中世後期蓮如上人によって組織された真宗門徒の講です。中島の真宗大谷派二十数軒は、毎月二十七日の夜、各家持ち回りで「御逮夜サン」を行っています。これを報恩講と呼ぶこともあります。

